

山下かおり 入塾趣意書

私は、障がいのある人もない人も、共に活躍できる社会を創りたい。

この想いを抱くきっかけは、5歳上の兄の存在だ。知的障害を持つ彼は、日常的に差別的な場面に出くわしていた。分かりやすい差別もあれば、笑顔を纏った拒絶、陰に隠れてされる暴力もあった。同じ家族として感じてきた悔しさ。私は、差別が生まれる背景にある、「障害」と言われる特性を持つ人々に対する偏見や誤解をなくしていきたいという想いを今もずっと抱いている。

もう一つ、「健常者が障がい者を支援する」という一方通行の構造にも疑問を抱いてきた。幼い頃から知的障害を持つ人たちとの関わりが多かった私は、彼らと接することでたくさんのことを学んだ。彼らと過ごす中で、私自身の凝り固まった“当たり前”や、人と比べて卑屈になる考え方が少しずつ消えていった。障がい者と言われる彼らは、私に教えるつもりはなかったようだけど、人は誰しも、誰かと比較せずとも皆それぞれ魅力ある存在であることを実感させてくれた。さらに、見返りを求めない優しさや、一生懸命さ、富や名声で人をジャッジしない素直さに触れ、私は「障害」がないとされている私よりも「障害」があると言われる彼らの方が優れている点も多く実感するようになった。しかし、そんな彼らの魅力も社会では価値だと認識されていない現実、価値になり得るのに見過ごされている現実、成長のチャンスが乏しい現実に悔しさを覚えてきた。

障がいのある人への支援は必要である。しかし、その上で、互いの異なる魅力や特性を知り、自分自身を見つめ直し、互いを活かしあえる場があれば、障害がある人もない人も、生きやすくなるのではないだろうか。そう思ったものの、思いを形にする一步が踏み出せなかった。

社会人になり、働き始めると、日頃報道される過労やうつ病がこんなにも身近だったのかと衝撃を受けた。過労で心身が追いつめられる人、理不尽な抑圧に苦しめられる人、生産性や効率ばかりが重視され、人間が消費されていく様子を目の当たりにした。「仕事は苦しくて当たり前」。そんな考えは時代遅れだが、働きながらも幸せを感じられる組織は理想論のようにも思えた。利益と幸せの両方を追求できる組織はどうすれば実現できるのだろうか。そう考えていた時、障害のある人もない人も共に活躍するインクルーシブな組織にこそ、そのヒントがあるはずだと確信したのである。

私がおもうインクルーシブな組織とは、努力ではどうにもできない困りごとを受け入れ、強みや特性が活かせる仕組みがあり、複数の軸で人の魅力を評価することで、働く人々の可能性が最大限引き出される組織だ。そこでなら、「障がい者」として見られ、魅力が価値になり得なかった兄のような存在も、幸せを諦めそうになった社会人の私のような存在も、共に活躍していけるのではないだろうか。

しかし実際には利益追求が前提の組織において、インクルーシブな環境づくりがうまくいかない事例も多い。現時点では、民間企業で法定雇用率を達成している企業は全体の5割にも満たないし、雇用率達成企業でも、現場ではコストばかりが増えるといったリアルな声も上がっている。「健常者と一緒の職場より、障がい者が多い職場の方が安心する」といった声もある。難しいことは重々承知である。だからこそ他力本願ではなく、私自身が実践者でありたい。きれいごとだと思われても、そう思う人たちと対話を続けたい。自分一人の力ではなく、多くの人の意見を心を込めて聞き、協力し合いたい。

私は、この家族のもとに生まれてきた使命感、そしてこれまで“障害”というものを通して抱いてきたもどかしさ、悔しさ、そしてその悔しさを変えていける確信を胸に、松下政経塾への入塾を決意した。今あるのは志一つ、ただそれだけである。これからは塾生として、徹底的に現場の声に耳を傾け、真正面から向き合う覚悟だ。強い想いと客観性を併せ持ち、覚悟と温かさを持って、多くの人の心の奥の闇に光を灯せるリーダーに、私はなりたい。